

『一ふさのぶどう』 要約例

ジムの持っている西洋絵の具がどうしてもほしかったぼくは、ある日、休み時間に教場で一人になったとき、がまんできずに絵の具をとってしまう。しかし、ジムと友人たちにはれてしまい、ぼくの好きな受けもちの先生の部屋につれていかれた。先生はぼくにぶどうをくれて、明日必ず学校に来るようにぼくに言った。翌日、不安な気持ちで学校へ行くが、先生のおかげでぼくとジムは和解した。その後、ぼくは少し大きくなったが、大好きだったあの先生のような存在はどこにも見つけることができずにいる。